

詩のレッスン

現代詩二〇〇人・21世紀への言葉の冒険

編著

入沢康夫 三木卓
井坂洋子 平出隆



詩のレッスン

現代詩二〇〇人・21世紀への言葉の冒険

入沢康夫 三木卓
井坂洋子 平出隆

小学館

詩のレッスン

1996年4月20日 初版第1刷発行

編著者 井坂洋子
(五十音順)

入沢康夫

平出 隆

三木 卓

発行者 遠藤邦正

発行所 株式会社 小学館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋 2-3-1

電話 編集 03-3230-5800

制作 03-3230-5333

販売 03-3230-5739

振替 東京 00180-1-200

D T P 小学館電子編集センター

印刷 図書印刷株式会社

編集 吉ヶ江弘久

Ⓔ 〈日本複写権センター委託出版物〉

本書の全部または一部を無断で複写(コピー)することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(☎03-3401-2382)にご連絡ください。

造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、乱丁、落丁などの不良品がありましたら、「制作部」あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

©YOHKO ISAKA

YASUO IRISAWA

TAKASHI HIRAIDE

TAKU MIKI 1996

Printed in Japan

ISBN4-09-379522-3

詩のレッスン

装幀 菊地 信義
装画 後藤 えみこ

詩のレッスン

目次

目次

◆は入沢康夫、♣は三木卓、♥は井坂洋子、
◆は平出隆の執筆です。

失恋 ねじめ正一 ————— 魂の探査衛星 ♠ 012

ボルノ・パツハ 谷川俊太郎 ————— 調和と禁忌 ♣ 016

黄色い夜 白石かずこ ————— シヤーマンの素足 ♥ 020

燃えるモーツアルトの手を 吉増剛造 ————— 音響的宇宙へ ◆ 024

闇の力 北村太郎 ————— 目の「現在」 ♥ 030

猫の休日 平田俊子 ————— 「稼ぐ」ことの残酷さ ♠ 034

レイモンド・カーヴァーを読みながら 辻征夫 ————— 自尊心とユーモア ♣ 038

ある老人 飯島耕一 ————— 島の時間 ◆ 042

童謡 石垣りん ————— 《くらし》のなかの深淵 ♠ 046

資質をあらわに 荒川洋治 ————— 「俗」に入る姿 ♥ 050

ウサギの罌／死んだネズミ 関根弘 ————— 無邪気と残酷の結合 ♣ 054

さいころ病院 天沢退二郎 ————— 夢と死と ◆ 058

みな響あり 渋谷孝輔 ————— 風狂心の精髓 ♠ 062

いやさかさかさかさのさのさ 伊藤比呂美 ————— 生の賛歌 ♣ 066

夜の台所で情を抒べるとすれば 清水哲男 狂気と正気 ♡ 070

鳥籠売りジョンの唄 高橋睦郎 誉めうたの魔法 ◆ 076

はるなつ あきふゆ 大岡信 開かれた心の成果 ♣ 080

櫓 粒来哲蔵 散文詩の栄光 ♠ 084

歳晚散策 那珂太郎 息づく無の空間 ♥ 088

素速い雲 川田絢音 聖画のエロティスム ◆ 092

緑濃い峠の／小景 吉野弘 発見する ♣ 096

ことばの冠 牟礼慶子 ことばを超える沈黙 ♥ 100

冬休み 田村隆一 物の光り・物のリズム ◆ 104

朝焼け 三好豊一郎 澄み切った孤立 ♠ 108

野火／＊ 嵯峨信之 魂のプラネタリウム ♣ 112

柳の箸 森原智子 薄明の旅 ♥ 116

われらを生かしめる者はどこか 稲川方人 禁じられた帰郷 ◆ 120

夜のゴックスヴィレール／ストラスプールの小さな船着場で 長谷川龍生 ものを見据える力 ♠ 124

象／たんぽぽ 川崎洋 大きな肯定 ♣ 128

路上 新川和江 母系の鎖 ♥ 132

しめやかな潮騒 中村稔 理知と含羞 ◆ 136

子供の領分 多田智満子 想像と思弁 ♠ 140

第一課 安西均 続いていく成熟 ♣ 144

日原鍾乳洞の「地獄谷」へ降りていく 氷見敦子 深く内部に降りて 148

妻の奇癖 清岡卓行 造型のアクロバット 152

死者の笑い 安藤元雄 見事な「挨拶」 156

売春処女ブアブアが家庭的アイウエオを行う 鈴木志郎康 処女の起爆力 160

月の人 阿部岩夫 妄想の鉦 166

儀式 吉原幸子 受苦の輝き 170

聖家族 正津勉 露悪と純情 174

もぐらの歯 小長谷清実 おとなしい凶器 178

蘭らんらん 瀬尾育生 詩そのものの寓意 182

敵二殺サレタ若者ノ祈り 宗 左近 火を背中に負って 186

黄金の川／嶋立つ川 岡田隆彦 影と黄金 190

とほうもない望み 木島 始 愛うた言葉 194

冥王星で 小野十三郎 異郷を見る目 198

居酒屋にて 茨木のり子 快い叱咤 202

わかれのかた／枝 江代 充 純粋者の問いと祈り 206

おどる緋鯉 財部鳥子 ノスタルジーを超えて 210

独楽／鏡／手は／蔓草 高野喜久雄 さまざまな力学 214

あけがたにくる人よ 永瀬清子 詩の香氣 218

勇気 天野 忠 力をあわせて 222

出航 北川 透 呼びあう詩魂 ♠ 226

新鮮で苦しみおおい日々 堀川 正美 時代より深い言葉 ♣ 230

ぼくはこの世界と取引している 福岡 健二 パスワードとともに ♥ 234

中腰の女 建畠 哲 「粹」を破る ◆ 238

四行詩の道草(抄) 高橋 順子 非凡な「何げなさ」 ♠ 242

感情的な唄 岩田 宏 戦後の都市青春の心情 ♣ 246

プール 小池 昌代 きもちの水 ♥ 250

烏賊 窪田 般彌 深海の夜へ ◆ 254

ひとひらの月ひとひらの愛 諏訪 優 生きてある切なさ ♠ 260

あかちゃん／とおいところ／よるのみち まどみちお やさしさとふかさ ♣ 264

夜まわり 片岡 文雄 父を求めて ♥ 268

モンシロチョウ夏型 伊藤 聚 世界の終りのフィルム ◆ 272

ハンプティに語りかける言葉についての思いめぐらし 金井 美恵子 詩神への鮮やかな挑発 ♠ 276

海の部屋 高良 留美子 詩人の心 ♣ 280

週一回のりハビリテーション 白石 公子 現代というフィルター ♥ 284

パンダ来るな 藤井 貞和 破れかぶれと痛切 ◆ 288

幻花 粕谷 栄市 生きるという悪夢 ♠ 292

ブ／ふと 藤富 保男 愉快な詩人 ♣ 296

もうだれもないのに／ある会話 吉行 理恵 風の詩人 ♥ 300

炉のような人 辻井 喬 — 白熱するもの ◆ 304

商人 谷川 雁 — 硬質の比喩と情動力 ♠ 308

夜 富岡多恵子 — 感情のアラベスク ♣ 312

生きている貝 鈴木ユリイカ — 愛の詩人 ♥ 316

鳥の骨組みに関する覚書・同補足 岩成達也 — 《なまなましいもの》 ◆ 320

塔老人 嶋岡 晨 — 新造語の奇妙な魅力 ♠ 324

曠野 新藤涼子 — 薔薇の詩人 ♣ 328

風 金 時鐘 — 風のはざま ◆ 334

祝祭 中本道代 — 廃屋から ♥ 338

(電車は) 八木忠榮 — 「日常」の深い暗い酔い ♠ 342

青 江森國友 — 肯定の詩人 ♣ 346

時間 関口 篤 — 万物流転 ◆ 350

人質／家の崩潰 大野 新 — 生の人質 ♥ 354

雨の段々畑 佐々木幹郎 — みずみずしい「熟成」 ♠ 358

『生』 中江俊夫 — 回路を求めて ♣ 362

石工 鈴木 漠 — 石工と詩人 ◆ 366

記憶 小松弘愛 — 老いを見つめて ♥ 370

樹木開花 安東次男 — 「語りえないもの」の造形 ♠ 374

隣に現われたもの 犬塚 堯 — 苛酷な時代の詩 ♣ 378

佃渡して 吉本隆明 情感のマチエール ◆ 382

くだものにおいのする日 松井啓子 謎かけの名人 ♥ 388

地名 安水稔和 地霊との劇的な呼び交わし ♣ 392

鳶と稲穂 加島祥造 晩年のみのり ♣ 396

蜜月 阿部日奈子 あざやかな語りの魔術 ◆ 400

失明 松浦寿輝 熱い衰退 ♥ 404

飛鳥坐神社のおんだまつり 青木はるみ 日常のなかの異界 ♠ 408

雪道を閉さす…… 朝吹亮二 無響室内の言葉 ◆ 412

夜の船 新井豊美 豊かな調べ ♥ 416

筆跡 清水和 無窮の夢への陶酔と共鳴 ♠ 420

あとがき 編集委員 424

現代詩クロニクル1945~1995 大日方公男 426

詩人紹介・執筆者紹介 編集部編 442

収録作品データ 編集部編 460

本文・詩人紹介写真 星野勝成

詩人紹介写真 宮内勝

本文写真 「週刊ポスト」写真部

詩のレッスン



魂の探查衛星

(詩・ねじめ正二)

入沢康夫

何よりもまず、「詩には作者の気持が述べられてある」という《迷信》から脱け出そう。気持を述べるのは、散文の仕事だ。詩は述べない。詩は問いかけ、詩は求める。詩は探索し、詩は発信する。詩は、言葉で組み上げられた、インナー・スペース 内的宇宙の探查衛星だ。

日常の、しごくありふれた言葉も、詩人によって選ばれ、あたらしい組み合わせの中に取り込まれて、魂の夜空に打ち上げられると、それはいまだかつて誰一人耳にしたことのない不思議なメッセージを、——しかし、内的宇宙の《真実》に深くかわるこの上なく正確な諸データをいっぱいに含んだメッセージを、読者の心に直接送り届けてくる。

詩は、言葉で造られた、内的宇宙の探查衛星だ。ひとたび打ち上げられると、それは常に探索し、常に発信をつづけている。とうの昔に世を去った萩原朔太郎や宮沢賢治や中原中也の詩、もう何十年も以前に書かれた作品が、今でも私たちの心を揺さぶるのは、そのせいである。

詩に接するのに《解釈》はいらない。頭で詩を理解しようとすることには、何の益もな

い。すぐれた絵画や音楽や映画に感動しているとき、私たちは《解釈》しているだろうか。大切なのは、解釈ではなくて、心を開いてメッセージを《感じ取る》こと、《共に魂をふるわせる》ことだ。今回から、およそ二年間にわたって、毎週一篇ずつ紹介していくのは、そうした内宇宙の探査衛星からの発信の種々相である。どうか心のアンテナをのびやかに大きく開いて、微妙なメッセージを《感じとろう》とこころみていただきたい。

さて、第一回としては、ねじめ正一の作品を選んだ。「詩壇の芥川賞」などともいわれている「現代詩人会H氏賞」を受賞した処女詩集『ふ』に収められているもの。

ねじめは、この詩集のあと、一層方法を徹底させ、自分の日常生活と不即不離のところに、きわめて猥雑過激でスキャンダラスな想像世界をことさらに構築するという冒険にふけり、一部の批評家からは「便所の落書」だと、唾棄されるまでになる。そうした作品のどれか一つを紹介したかったが、いずれも長くて、スペースの関係で断念せざるをえなかった。やがて小説にも進出し、『高円寺純情商店街』で直木賞を得たことは、読者もご承知であろうが、過激な彼の詩も、その底に常に《純情》な一筋の流れがあることを指摘しておきたい。

あまりのあでやかさに 照れながらキッスをする
 らゆらもどかしく 彼女の胎内に堕ちてしまった いっ
 しょに暮らせると思つて はじめて行爲した呼吸の卵が
 もう彼女に すらすらと値踏みされてしまったとは そ
 れでもせめてもの救いか 頭の上で白い紐が光っている
 おお この紐 救われはしないよ 彼女のぴかぴかに
 気取つた性感だ ああ どのぐらいここにいればいいの
 かと 堕ちたばかりの感傷を鳴らすひまもなく 彼女の
 部屋から 男の声がする うつくしいよ 別に嫉妬もお
 きない うつくしいよ うつくしいよ 別に嫉妬もおき
 ない うつくしいよ 灯が消える 紐が揺れる 別に嫉
 妬もおきない 紐が揺れる 紐が揺れる こうなればぼ
 くの仕事は男がぼくと同じように 彼女の胎内に堕ちて